

第2回事保連シンポジウム開催

一般社団法人日本事業所内保育団体連合会主催の「第2回事保連シンポジウム大阪大会」が、2019年2月24日に、関西大学梅田キャンパスにて開催されました。当日は保育所を運営する事業者や保育士など50名の方々に参加いただきました。

概要

2015年の子育て支援法から、こども園、小規模保育、事業所内保育の拡大に加えて、近年は企業主導型保育所の大幅な拡大など、未就学児童を取り巻く環境はますます多様化しています。さらに、これから始まる幼児教育無償化や入管法改定が社会に与える影響は未知数であり、保育業界は、さらに大きく変化することが予測されます。今回のシンポジウムでは、こうした状況を踏まえ、どのような「保育の未来」が期待でき、また未来をどのように変えていくことができるのかについて、産官学それぞれのお立場からのご意見を伺うことができました。ここでは、基調講演で登壇された内田由紀子氏（京都大学こころの未来研究センター准教授）、浅野大介氏（経済産業省商務・サービスグループ課長）のお話から、いくつかのトピックスについてご紹介します。



テーマ：保育の未来

主催：一般社団法人日本事業所内保育団体連合会

日時：2019年2月24日（日） 13:00～16:20

場所：関西大学梅田キャンパス

参加者：50名

参加費：無料

プログラム

- 12:30 開会
13:00 開会の挨拶
13:15 第一基調講演 内田由紀子氏（京都大学こころの未来研究センター准教授）
「保護者の文化が子育てに与える影響」
14:00 第二基調講演 浅野大介氏（経済産業省商務・サービスグループサービス政策課長（兼）教育産業室長）
「保育の生産性と『「未来の教室』」
14:45 学会報告 佐藤 剛（日本社会福祉マネジメント学会会長）
15:00 休憩
15:15 パネルディスカッション「保育の未来」
モデレーター 石川和男（社会保障経済研究所代表）
内田由紀子氏（京都大学）
浅野大介氏（経済産業省）
佐藤 剛氏（日本社会福祉マネジメント学会）
16:10 質疑応答
16:20 閉会の挨拶

The essence of the topic

基調講演①

内田由紀子氏（京都大学こころの未来研究センター准教授）
「保護者の文化が子育てに与える影響」

心理学をご専門とし、文化や価値観が私たちの中でどのように形成され、どうやって大人になっていくのかという過程に関心をもつとともに、日本人が有する特徴を比較文化の視点から研究を進めている内田氏。保育所に自らのお子様を通わせたとご経験から、保育所が、子どもたちに「スキル」「マナー」「愛情」といったたくさんのことを伝える場所であるとの認識をもつ。保育事業者、保育者の活力となる豊富な知見をお話しいただきましたので、抜粋して紹介します。（以下、内田氏）

文化差はいつ、どのようにして表われるのか

私の研究課題の1つとして、文化差を見出していくこと、日本人特有の特徴はなんであるかを明らかにしていくことがあげられます。そして、これをしっかり理解し、世界と向き合うことがとても重要であると考えています。文化差がいつ、どのようにして生じるかについて、興味をもって研究を続けていますが、実は、大人では、基本的な認知能力、認知の仕方については、先行研究より文化差があることがわかっています。

ある物事を判断するとき、背景情報を無視する「絶対判断課題」と、背景情報を考慮に入れる「相対判断課題」があります。これを日米の大人に対して行った研究によると、日本人は米国人に対し、「背景情報を無視することが苦手」であることがわかっています。

これはいろんなことに関係していると考えられますが、わかりやすい例では、「空気を読む」があるでしょう。日本人が、ある状況やコンテンツなどを考慮したうえで意思決定していくのに対し、米国人は、その事象だけに集中して判断していく傾向にあるということが出来ます。

さらに興味深いのは、同様の研究を6-8歳、9-13歳に対して行った結果から、6歳頃から大人と同じような文化差が出ていることです。学童期に入る前から「空気を読む」ような、なんらかの学習を繰り返し行っているのでしょうか。また、他の研究チームが保育園で実施した研究からは、年長さんには文化差はあるが、それ以前にはみられないとのことでした。大人（保護者・保育者等）の行為・行動や、こうしたらやる気が出るというような社会文化的要素や、文化の中で期待される学習が、学童期までに完成しているのではないのでしょうか。



内田由紀子氏

絵本における価値伝達

子どもを保育所に通わせていた経験から、幼児期の子どもたちが、自分の気持ち、相手の気持ちを考えながら意思決定する場面に立ち会うことがありました。そこで、幼児たちが相手の立場に立とうとするまでに、どの程度の学習が進んでいるかに関心を持ち、未就学期の教材となる絵本について調査をしました。

日本、アメリカ、カナダで売られている絵本の中身を分析し、保護者の評価などを調査したのですが、日本の保護者や保育者たちに圧倒的に評価が高かったのが、『そらめくんとめだかのこ』（なかや みわ作）という絵本でした。内容は、わがままで自分勝手なそらめくんが、あることをきっかけに困っているめだかを、他のみんなの力を借りて助け出すというもの。この絵本をアメリカやカナダの保護者に読ませてもさほど評価が高くありませんでした。アメリカで評価が高かったのは、わがままなマックスくんが、お母さんに叱られ、部屋に閉じ込められてしまいますが、妄想を膨らませカイジュウの国に行き、王様になってしまうというストーリー（『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック作）。カナダでは、ハロルドくんが船の絵を描きながら、航海に出てしまうという独創的な物語で、登場人物が1人の絵本です（『はろるとむらさきのくれよん』クロケット・ジョ

ンソン作)。日本の『そらまめくん・・・』が思いやりをテーマにしているのに対し、『かいじゅうたち・・・』や『はろるど・・・』は、冒険心や想像力を中心に描いています。

日本の小学校教科書のストーリーを分析した今田（2012）さんの研究でも、日本の教科書では「思いやり」「自分の役割を受け止める」「忠実さ」が上位にきているのに対し、アメリカでは「自分で目標を決める」「自尊感情」「達成」が高い。文化差が非常にわかりやすく出た調査と言えます。

また、子どもに希望する生き方調査（内閣府.2007）では、第1位が「人に迷惑をかけない」、2位が「身近な人との愛情を大事にする」、3位が「社会や他の人々のために尽くす」で、海外の人たちからすると、日本の保護者の考え方は、ポジティブではなくネガティブを避けようとする生き方を希望しており、これには驚いているようでした。日本では、人に迷惑をかけない生き方が、大人になる自立の一つの考え方として教育の基盤になっているのでしょうか。こうしたことは、内閣府が行った「小学生・中学生の意識に関する調査」（2013年）でも明かです。私たちが当たり前だと思っている価値観が、世界的には、それほど当たり前でもないんだということがわかります。アメリカでは、社会関係の流動性から、自尊心が高くないと生きていけない社会であり、その社会で生き延びるための心理傾向獲得の方法の1つに教育があるのでしょうか。

また、人の能力に関する考え方にも文化差があります。Dweck（1986）が行った研究によりますと、能力は生まれもったもので、才能は見出し輝かせることが大切であるという固定的能力観で能力主義であるアメリカに対し、能力は変わるもので、頑張ればできるようになる、少しでも向上することを目指す努力主義であるのが日本の傾向です。

これらのことを総合すると、自己の価値伝達には様々なツールが用いられていて、無意識的に価値観が伝達されていることも多く、保育者や養育者は、自分自身のもつ文化的な特徴や価値観を意識しておく必要があるのです。

The essence of the topic

基調講演②

浅野大介氏（経済産業省 商務サービスグループサービス政策室長併教育産業室長）

「保育の生産性と『未来の教室』」

学校以外の塾や教室、就学前を含めた民間教育サービス全般を所管する教育産業室をまとめ、さらには保育所や学校も含めた日本の「学び方」「学びの教育システム」を変えていこうというプロジェクトの推進役である浅野氏。5年後、10年後の社会から逆算して、今、どんな教育・保育が求められているのかについて語られた内容から、一部を抜粋して紹介します。（以下、浅野氏）

「すぐそこにある未来」の姿

「未来の教室」の未来とはそんなに遠いものではなく、我々は5年後くらいを想定し、その未来において「これが当たり前の学び方」であるということについて、本日はお話を進めたいと思います。まずは、「教室」（授業）について。今は、みんなが同じところに集

められ、一定時間一緒に過ごすような形式ですが、未来ではその教室の在り方ではなくなると考えています。また、学年という概念もなくなるでしょうし、理科や社会といった教科の壁も、文理融合で社会課題を解決していかなければならないこれからの社会では弊害になるため、同時に学んでいくことになるのでしょう。

そこで、「すぐそこにある未来」「未来の教室」を創造していく過程のキーワードとして、「第4次産業革命/Society5.0」や「働き方改革」が挙げられます。わかりやすくご説明しますと、みなさんが日々便利に使っているパソコンやスマートフォンですが、知らず知らずのうちに重要な個人情報を、その事業者の方へ渡していることになります。スマートフォンで検索する、登録・購入するといった行為により、自分にはどういう興味があり、どんな行動をとっているのかを知らせることになり、結果、欲しい情報（商品等の）と即座につながるわけです。個人情報を提供することによる恩恵があるのが今の世界であり、これがもっと進化することは間違いないでしょう。これには、膨大なデータをどれだけ安全に世の中に提供できるかという問題もありますが、それができれば新しい便利なサービスをどんどん享受できるし、それを可能にする事業者に富が集まります。これは医療と薬の関係をみても明らかです。症状に応じて、誰にもほぼ同じように処方されている薬ですが、実際には、どの程度の効果をもたらしているかわかりません。一人ひとりの遺伝子情報や生活習慣にあった薬が処方されるようになれば画期的ですし、相当な回復も見込めるでしょう。そんな未来も、そう遠くはないはずです。

これは「学び」についても同じです。自分はどんなことに興味があり、思考するときの特徴はこうであって、それに合致した最適な学び方を選択していける社会が来るのです。自分に必要な知識を、自分がわかりやすい形で手に入れ、自分が話すべき人と、いつでも話すことができ、自分の中に新しい知識を満たすことができる、自分に最適な学び方を手に入れることができるのです。

「すぐそこにある未来」をつくり上げていくうえで人工知能（AI）の活躍が期待されますが、AIやデータの開発によって手に入れたものを社会に落としこんでいくのは、当分は私たち人間の仕事となるでしょう。AIの力を借りながら課題を設定しつつ、社会との間を埋める調整は、相変わらず人間が行うということです。ではその「調整力」を、どういった教育で養っていくか。我々は、STEAM（Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics）が混じりあった教育の在り方が、調整力を養うのに必要であると考えています。つまり、ある社会課題に対して、データを見つめ、様々なテクノロジーを活用して解決に導き、美的感覚やサービス全体のデザインを意識しながらモノやサービスをつくっていく能力を育くめる社会を目指したいのです。こうしたことは、実は世界中で議論されていることです。

もう1つのテーマである働き方改革。時短と勘違いされがちですが、本質は時間を有効活用することで、「自分が一番価値を生み出せる時間の使い方」をすることをいいます。会社に来て、10時間近くずっといて、時間になれば帰るという形式が自己目的化しているのに、一向に変わらない。時間単位で価値を量るという社会から脱却しないといけません。時間と価値をある程度切り離すことも必要かと。たとえば、テレワークが普及すれば母親の離職も減る可能性があるのです。

また、日本は今後いろんな多様性を包摂していくことになります。つまり、多国籍の方々

を受け入れる社会や、人生 100 年の社会の中で、高齢者や障害者がどんな価値を生みだせるかを考えていかなければなりません。いろいろな特徴をもった人たちの知恵や強みを集めてイノベーションを起こしていく必要があるのです。



浅野大介氏

「未来の教室」実証事業の目指す姿

経済産業省は、現在「学びと社会の連携促進事業」の予算を使い、様々な実証実験を行っています。コンセプトはとても単純で、一斉授業の「教科学習」の時間を短くし、個別で探究する「探究学習」のボリュームを増やしていこうというものです。子どもの頃から「学ぶ理由」を知り、学ぶ自分の「ワクワク」感から学びを拓げる学習と、教科学習のサイクルをうまくまわしていくシステムをつくっていきます。

このような考え方に基づいた象徴的な実験を千代田区立の中学校が実施しています。数学の授業を一変させる取り組みです。生徒を、教室ではなく黒板のないカフェテリアに集め 1 人に 1 台パソコンを与えます。生徒は、チャイムが鳴る前から集まってきてパソコンを開き勉強を始めています。ある生徒は 1 人で黙々と、またある生徒は友だちと相談しながら勉強している。学習意欲が低い生徒であっても、この形態にしてから自分で目標を決めて勉強をやり出すという興味深い変化が現れました。わからなくなったことをそのまま放置するのではなく、戻って理解しなおす、わからなかったら助けを求めるといった行動ができるようになったことは非常に画期的であると考えます。

他の取り組みでは、小学校で導入されるプログラミング教育も対戦スポーツとの親和性が非常に高く、プログラミングで戦略や戦術を構築していく面白さを見出したり、かけっこで遅かった児童も、走る動作を科学することで教科の世界を広げるなど、科目の評価の視点も変わっていきます。また、ある農業高校では、圃場に設置した農業 IoT センサーを用いてデータ分析を行い、プログラミング、ロボティクスを学びながら「統合的な害虫管理」をテーマとして探究しています。教科や学年を越えた実践的探究プログラムを開発するといった先進的な取り組みがとても注目されています。

一方、保育の現場はどうでしょうか。現場がきつい、給料が少ないといった声を聴くこ

とがありますが、そうした状況の中からは、未来を見据えた保育や教育は生まれにくいでしょう。現場がきつい、給料が少ないといった課題を解決するための方策の1つとして、まずは現場の生産性を高めないといけない。生産性とは、「付加価値÷投入された労働時間（人・時間）」のことをいいます。したがって、付加価値を高めたり、労働時間を減らしていかないと、現場のきつさや給料は変わっていきません。我々がお勧めしているのは、やはり現場でICTを使いましょうということです。保育士の方々が毎日記録している、監査に必要な帳票も、保護者とのコミュニケーションに使われる連絡帳も、ペンで書かれた瞬間に、子どもたちの成長に必要なデータとはかけ離れた存在になってしまいます。ICTを活用し、デジタル化した記録（データ）が、子どもの成長や発達に活かせるデータとなり、子どもの将来にわたって意味を持ったデータとなっていくのです。

行政も含め、1つ1つの保育園で、生産性を高められるようICTを活用する動きが広がることを期待しています。

Report①

日本社会福祉マネジメント学会 学会報告

佐藤 剛 氏（日本社会福祉マネジメント学会会長）

日本社会福祉マネジメント学会の考え方、取り組むべき社会課題とともに事業内容について報告をしていただきました。詳細は日本社会福祉マネジメント学会サイトをご確認ください。

（日本社会福祉マネジメント学会）



佐藤 剛氏

Report②

ポスター発表



細田千賀子さん

「親と子と保育士で乗り越える「イヤイヤ期」～保育士ができること～」



大谷優子さん

「保育所における発達障害支援の課題と特別支援保育コーディネーターの専門性の向上」

Report③ パネルディスカッション

テーマ「保育の未来」

パネリスト

モデレーター 石川和男（社会保障経済研究所代表）

内田由紀子氏（京都大学）

浅野大介氏（経済産業省）

佐藤 剛氏（日本社会福祉マネジメント学会）

「保育の未来」と題したシンポジウムの最後を飾るパネルディスカッションでは、モデレーターに、各方面でご活躍の石川和男氏を迎え、「未来の保育」についても展望していただきました。

冒頭では、内田氏の講演で使用した内閣府による調査「子どもに希望する生き方」が話題となり、このランキングで日本の保護者が第一にあげたのが、「人に迷惑をかけないこと」であることに対し、欧米や中国などの諸外国では、愛国心や社会に貢献することが上位にきていると内田氏が比較文化の観点から指摘しました。これを受けて「未来の教室」の推進者である浅野氏は、日本の社会には、「人に迷惑をかけない」ことが、すなわち「自立する」ことの第一歩であるという文化があり、未来の教室で育んでいきたい素養として、「人に多少の迷惑をかけても愛される人」「人の世話になりながら自己実現を果たす人」を挙げ、これからの日本人の価値観や文化の変容にも期待を寄せています。

また、批判されることの少なくない日本の教育・保育ですが、諸外国からみると優れた部分も際立っていると内田氏はいいます。「施設の清潔さ、子どもや親との対話時間の長さや濃密さ、そして子どもたちの成長や発達に対して非常に丁寧に支援を行っていることが高く評価されています」。施設面のインフラだけでなく、安心・安全を十分に配慮した、保育者や教員といった、支える・教える側の養成度合いの高さが評価されているということ

になります。

日本社会福祉マネジメント学会の佐藤学会長に対しては、「経営大学院の教授である佐藤氏が、社会福祉学会を率いることについて、少し違和感を覚える方もいらっしゃるかもしれませんが」と石川氏が素直な質問を投げかけると佐藤氏は、「社会福祉と経済活動は相容れないものではなく、また政策の変化によって利用者が戸惑うことがないよう、事業者は経済的に自立した存在でなければなりません」と強く主張しました。

福祉事業者が収益をあげてはいけないという意見も、日本の社会にはまだまだ根強く残っており、佐藤氏も、「当学会としても、社会福祉をマネジメントという切り口で科学し、持続可能な社会や社会福祉を築いていけるよう取り組んでいきたい」と結んでいます。

また、浅野氏からは、保育所に子どもを預けようとする親の視点から、待機児童問題を題材に、「保護者、特に母親の“苦しさ競争”があって、苦しいから保育所に預けられる」と。保育所に子どもを預けて映画や美容院、さらにはカフェに行くなどもってのほかという社会は、健全であるかどうか議論の余地はありますが、内田氏は、「少なくともヨーロッパでは夫婦の時間を大切にする文化があり、親の時間の使い方には日本のようにネガティブな意見はないようです」と、隠れた待機児童問題を指摘しています。

苦勞して保育所の送り迎えをし、育て上げるという保護者の気持ちと、子どもへの愛着は尊いですが、保育所の活用によって、自分の自己実現や気楽な子育てを実現し、プロの保育士に安心して保育を任せられる社会というのも、未来の保育の選択肢にはあってもよいのではないのでしょうか。



次回開催

次回は、2019年6月8日（土）に、日本社会福祉マネジメント学会の研究大会と同時開催を予定しています。

